

1月14日(火) “滋賀県立河瀬高等学校”を訪問しました!

○訪問テーマ 「ICTを活用した授業実践と今後の展望」

○訪問した委員 土井 真一 委員 藤田 義嗣 委員 岡崎 正彦 委員 野村 早苗 委員

○学校概要

昭和58年(1983年)に普通科高校として開校しました。平成15年(2003年)には河瀬中学校を併設して、令和2年(2020年)3月に中高一貫教育校15期生が卒業します。

「志成」を校訓として、生徒が希望する進路を実現できる確かな学力とたくましさを育てる「魅力と活力ある進学校」として、未来社会に貢献できる人材の育成を目指しています。

○訪問の様子

初めに田中校長から学校概要について、続いて久保川教諭から、河瀬高校におけるICT活用の取組状況等について説明がありました。

その後、ICTを活用した2年生の授業を3クラス参観しました。

参観後は、各教育委員が取組状況について質問をすると、学校からはICTの活用による効果や課題について話がありました。さらに今後のICT活用のあり方について意見交換が行われました。

○授業の様子



日本史Bの授業



コミュニケーション英語Ⅱの授業

○ICT活用の取組状況等についての説明より

- 〈環境整備〉・平成27年(2015年)に複数教員からあったICTの必要性の声をきっかけに、“持参セット”(プロジェクター、マグネットスクリーン、ノートパソコン)からスタート。
 - ・校内での検討を重ね、県の研究指定を受け、同窓会からの支援などにより徐々に整備を進める。(書画カメラ、スクリーン、電子黒板機能付きプロジェクター、教材提示用PC、デジタル教科書、生徒用タブレット80台、教員用タブレット)
- 〈授業実践〉・書画カメラによるポスター発表。
 - ・インターネットを用いた探求学習。
 - ・クラウドストレージによる教材の共有。(大容量ファイル教材の共有)
 - ・クラウド上の表計算ソフトによる生徒間の意見の共有。
- 〈業務の効率化〉・アンケートの電子化。
 - ・生徒との教育相談や長期休業中の近況報告への活用。
- 〈課題と展望〉・大容量回線の整備、補修などの維持費が課題。
 - ・学校として作りたい生徒像に向けた育成計画が必要。

○意見交換より

委員：現在取り組んでいて、予算の都合により制限されていること、もっとできることや、やりたいことはあるか。

学校：本日英語の授業で行っていたような ICT を活用した双方向型授業は、滋賀県の教育ネットの環境ではできない。高速回線が必要である。

委員：ICT の活用によりどんな成果があるか。

学校：英検準 2 級合格者数が昨年度との比較で約 2 割増加した。英語 4 技能のバランスはよくなっており、デジタル教科書を活用することでリスニングやスピーキング能力向上に効果を発揮している。

学校：算数ドリルに取り組んでいる学校では、タブレットを活用することで個に応じた学習の効果が出ていると聞いている。しかし、高校の内容になると短時間のドリルだけで力を付けるのは難しい。

委員：単語や用語を覚えることには使えるが、実際に生徒が理解しているかどうかの確認などに使うには、ICT の使い方も違って来る。それを可能にするためには一人一台のデバイスが必要であり、できればそれを家でも使えることを想定することとなる。そうしたときに、県としてどこにお金をかけるかという話になってくる。

委員：基本的には、基礎学力が前提にあり、ICT というツールを使うことにより、先生の指導力の質や授業内容を変えながら教育の応用力を高めていくことで、子どもたちの総合的な人間力を高めていかなければいけない。



○教育委員より

<土井委員>

ICT を活用した授業を見学させていただき、先生方の熱心な取組によって、高校の授業が変わることを実感いたしました。授業での ICT の利用は、ICT の導入自体ではなく、それを通じて生徒の皆さんの学力向上を図ることが目的です。そのためには、ICT の活用方法、例えば効果的な視聴覚教材として用いるのか、調査ツールとして用いるのか、さらに思考力・判断力・表現力を高めるための活用方法があるのか、ICT を用いることが効果的な学習と ICT ではできない学習の切り分けなど、現場の先生方の実践に基づく研究が必要です。そうした研究を進めつつ、時代の先を見通して、しっかりとした計画に基づいて、各学校にふさわしい形で ICT 環境の改善を速やかに推進していく必要があると感じました。

<藤田委員>

ICT の活用状況を拝見いたしました。歴史の授業では、スクリーンによる図解を通じて生徒との対話を深め、地学の授業では、地球と月の動画を通じてリアル感を持ち学ぶことで理解を促され、英語の授業では、タブレットを用いてグループディスカッションを活性化させ、語学力の強化とコミュニケーションの向上に生かされていました。ここに至る経過は、学校と先生方の自発的取組から始まり、県や同窓会の協力の結果によるものであるということでした。全体としては、教材・教具としての ICT から本来の ICT が創り出す可能性の実現化が望まれます。今後、予算や先生方の取組方が更に発展していければと思います。

<岡崎委員>

地元の学校でしたが、今回初めて訪問させていただきました。現場の先生方の試行錯誤がうかがえる ICT を活用した授業への取組を拝見しました。企業ではツールとして ICT を活用しシステム化して、効率と正確性を高めるために使用していますが、学校現場では黒板や教科書の代わりに ICT を使用しなければ授業ができないわけではなく、これからどのように授業に活用していくか創り込む過程であることが分かりました。また、ICT の利用環境については県として重点的に費用を投じ、未来につなげる教育ができる環境作りが必要であることを確認しました。

<野村委員>

情報社会の中で ICT を活用された授業は生徒たちが端末を使いながら進められており、時代の移り変わりを感じました。また、対談において先生方からは、いくつかの課題と ICT を活用した授業の組み立てに「やりがいを感じる」という報告を受けました。双方がうまく融合されたとき、より良い授業が展開されていくと思います。コスト面での課題はすぐに解消されるものではないですが、県として少しでも良い方向へ進めていけるように検討していきたいです。また、情報化では得られない活動を組み合わせることも重要で、「情報モラル教育」「心の教育」も大切に、生徒の成長に合わせた使い方がされることを望みます。